

〈記念論文〉

# 「方向感覚」を信じて

## (エッセイとお別れの挨拶)

大 住 誠

自分の人生の指針とか日々の生活の目標などというものには確実性などほとんど存在せず、自分が仮定している善悪の基準などあてになることは少ない。それ故に、日々の暮らしの判断は最終的には狭い経験則を超えた直感を頼りにするしかない。筆者はこのような直感による生き方の前提になる「無意識的な思想の方向性」を「方向感覚」と呼んでいる。

一見このような「無意識的な思想の方向性」を信じる生き方は無自覚な生の典型のように思えてくる。けれども、ここでの「方向感覚」も日常の生活経験としっかり繋がり、そこでの体験の意味を探り、言語化することで、ひとつの「知」となり得るものと信じている。そのような「知」は人生に深い意味と希望をもたらすものである。そして、そうした言語化等の行為がすでに哲学することに違いない。これはアカデミズムの哲学（講壇哲学）によらない「誰でももの哲学」とよべるものである。それはまた「学問の理論」としての哲学ではなく「思想（生き方）としての哲学」とも呼べるものでもある（むしろ、アカデミズムであつかう諸々の「学問理論」等は「思想としての哲学」を方向づける指針として日常生活に生かすべきであろう）。

ここでは、そんな事を念頭に、筆者が在籍した同朋大学での8年間の生活をふりかえりつつ、これまでの人生で「人生の処し方」の面で影響を

受けた 3人の思想家について取り上げ筆者の「方向感覚」の思想的見取り図を描いてみたい。このエッセイは大袈裟に言うと、今日ではあたり前な社会通念である「リベラリズム」を8年間で、いかに「根源的」かつ「日常的」に獲得できたかの極めて主観的な個人史である。

なお、本文の文章は1970年代の文体であり、内容も現在の文化（情報社会の文化）から多分にずれたものである。それでも、日常生活を「安らかに過ごす」工夫のひとつとしてお役に立てれば幸いである。

筆者の経歴について簡単に説明する。筆者は大学卒業後、神奈川県下の公立高等学校、教育委員会（県立教育センター）に22年間勤務した。高等学校では社会科関係の科目を教えていた。40代以降に心理療法や臨床心理学に関心を持つようになり48歳で神奈川県の教職員（地方公務員）を退職した。その後は大学院に再入学して心理学を学び、さらに私立医大の「神経科学研究室」で精神療法の研究を行った。そして63歳で本大学、大学院の教員になった。何故、48歳から方向転換を図ったのか？そこには入念に考えぬかれた人生設計など全くなかった。ほとんどが偶然であり、衝動的とも言える突然の欲求によるものであった。これも今では「方向感覚」によるものであると確信している。このようなことまで含めた体験を多少なりとも言語化できるようになってきたことは同朋大学に在職したお陰と感謝している。

## めだかの学校

同朋大学での最初の経験は授業を通して学生と通じ合う事の困難さであった。筆者は当時既に63歳で、20代の若者の語彙によるコミュニケーションは困難であったが、どうもそれだけではないらしい。毎回到授業のノートを念入りに作り臨んでも言葉の意味がほとんど伝わらないことが多かった。たとえばこんなことがあった。学期末の試験の際に試験問題に「文

## 「方向感覚」を信じて

章の空欄」を埋めるような問題を出した。ただし、テキスト、ノート持参とのことであった。ところが、試験中に数名の学生から、ひどく真顔で「先生、この試験問題はおかしいです。教科書やノートを見ても空欄がどこにもありません」と質問され動転した。さらに、そうした事実が後に本学生のみならず、身近な人々にも及んでいることを知り愕然とした。ネット社会の影響とか、発達系の若者が増加したとか、大学のレベル云々などということも理由の多くに挙げられているが、どうもそれだけではないらしい。

筆者はこうした学生たちとの対話にならないやりとりを通じて、深く方向感覚に任せざるをえない体験に行き着いた。これはひとつの「境地」とも言えるものであった。授業中にこちらが準備するテキストの説明等があまり役に立たないのを苦慮していると、突然、それらの内容が忘却され、授業の場の状況や雰囲気で筆者に自然発生してくる身体感覚に基づく言語やイメージに任せることができる瞬間が訪れるようになった。それも意図的に行ったことではなく、気がついたらそうなっていた。筆者はこうしたとき、自分自身を俯瞰できるような状態であった。深層心理学的に説明すると、筆者の自我が無意識の深い領域に退行していき、そこでの直感を頼りに新たな経験に向かう方法に行きついたということである。ここでの筆者は、おそらく瞑想に近い精神状態に入ったと言えよう。この方法では、テキスト等の概念の説明よりも、概念が砕かれたイメージの言語が多く使われる。理由は瞑想的になれば、なるほど、日常用いている概念が砕かれていくためである。

このような授業ができるようになると、その場が楽しくなってきた。それは筆者の身体と環境とがひとつに溶け合い、身体感覚が開かれるとともに、そこで発せられる直感に基づいた言葉が筆者の主観的体験を超えて学生達にも届くことが多くなってきたためである。何よりも驚きは、そういうときには大教室の隅々どころか、窓の外の名古屋の市街までもがリアルに視界に入ってくることであった。また、学生の何人かは授業の後に質

問に来てくれるようになったり、彼らの日常の話題が語られるようになったりしてきた。さらにはネット等で調べたという資料など持ってくる学生もいた。そういうときのやりとりは「教員—学生」という境界が瞬時取り払われていた。筆者はこのとき、日本のある哲学者が書いた「めだかの学校」という文章を思い出した。

そんな中でこんな出来事もあった。在職2年目で「発達教育学」と称する発達心理学の授業を担当したが、多くの学生が興味を示してくれない。150名以上の大人数の受講者で、授業は大教室で行われていた。筆者は、その時初めて気がいたら授業ノートを放棄して、テキストから連想する「その場での直感」を語るようになった。そんな授業を進めていくと、学生達のうちの何名かは授業のリズムに乗ってくるようになった。そうした日々が続いたある日の出来事である。筆者は滞在先のホテルで就寝しているときに不思議な夢を見た。普段は件の授業を続けているとき前の席に座っていても授業内容に関心を示さず、小説ばかり読んでいるA子さんが登場したのである。A子さんは友人数名と「明日先生と話したいことがあるので昼食の時に学食にきてください」と言った。そこで次の日、筆者は昼の時間帯に学食に赴いた。するとどうだろう、A子さんとその友人数名がそこにいるではないか。彼女は「場所を変えて話がしたい」ということで食堂の階段を登った。筆者はキツネに化かされたような不思議な気持ちになった。すると突然A子さんが「先生、この授業で試験をするんですか?」と問いただしてきた。筆者が「それはどういう事かね?」と尋ね返すと、彼女は落ち着いた面持ちで、かつ不安の表情を浮かべながら「この大学の一部の先生たちはテキスト通りの内容について厳しい試験をして、単位が取れないことが多いのです」と応えた。筆者は「まあ、あまり心配することはないでしょう。私の魂の声の一部が届けば充分だから。もうすでにあなたに届いているのでしょうか」と(筆者自身の悪癖であるが)大袈裟に冗談めかした返答をした。すると、A子さんと周囲の数人は突然

## 「方向感覚」を信じて

吹き出してしまったが、そのひとりが「授業は先生がそこで気づいたことを思いつくままにしゃべってくれた方がよほど心に残ります。大学まで来ても、つまらなかった小、中、高での授業の延長ではやりきれません。私たちの頭がわるいのかどうかは知らないけど、こういう勉強はあまり得意ではありません」と応えた。さらに一人は「先生のおっしゃることは単なる思いつきではなく、勘に基づく頓知というのかよくわかりませんが…」とも言った。「頓知」という懐かしい言葉が学生たちとのこのような出会いの場で聞いたことが心底意外であった。食堂の外に出て気がつくと、筆者は花壇の紫陽花の鮮やかな空間の中にいた。

筆者は昨晚の夢の内容が現実になった摩訶不思議な出来事に感動を覚えた。A子さんのような学生には、かつて非常勤講師として務めていた某国立大学ではお会いできなかった。この学生の言葉が筆者に長い間忘れていた教育の本質のようなものを思い出させてくれたのである。

筆者にとっては以上のような体験が「方向感覚」を一気に深め、それを言語化する第一歩になっていった。

## 鶴見俊輔と「思想の科学研究会」について

ところで、「誰が教師か生徒か分からない」という「めだかの学校」の比喻を筆者はどこで知り、「境地」という言葉をどのように学んだのだろうか？と記憶の糸をたぐってみた。

「めだかの学校」とは、鶴見俊輔氏（哲学者、1922～2015）から学んだ言葉である。鶴見氏は戦後の日本でリベラリズムの立場を貫き、10代のころから第二次大戦末期までアメリカで学んできたプラグマチズムの思想を自ら実践し、啓蒙することに生涯を尽くした。鶴見氏は社会運動家でもあった。鶴見氏の社会的実践では「ベトナムに平和を市民連合」・「声なき声の会」などがあり、昭和世代の後半に青春を送った一部の方の記憶に

は残っているかも知れない。筆者は鶴見氏が中心になって丸山真男氏、鶴見和子氏、都留重人氏などと1946年に結成した民間の学術研究団体「思想の科学研究会」に参加し、30代から40代までそこで学んだ。鶴見氏との直接的な出会いは、筆者がこの会に会員として参加したことによる。

「思想の科学研究会」の目的は、戦後の日本で「いかに民主主義思想と個人主義、多元主義を研究会同人も含めた民衆の生活の視点から確立していくか」というものであった。「思想の科学研究会」は「転向研究会」・「記号の会」・「集団の会」・「現代風俗研究会」など様々な分科会から成り立っていた。会では参加者が毎月「自分の人生における小集団での学びの体験」を話し合った。当時、筆者は真宗大谷寺院の副住職兼高校の教師で、赴任校での生徒たちと作った「哲学クラブ」の話題や、当時の真宗大谷派の近代化を目指す「教団改革運動」とそこでの信仰運動（同朋会運動）などを報告した。

思想の科学研究会では年1回の全体集会もあった。雑誌「思想の科学」は毎月出版された。全体集会に参加した方々は地方で独自の教育実践をされている教師、大学関係者、医師、当時の左翼から右翼までの様々な思想の実践者、文筆業者、一言居士など多種多様であった。こうした異なる思想、心情の人々が議論して新しい方向性を生み出すことが研究会の目的でもあった。筆者が「集団の会」と「思想の科学研究会」全般から学んだことのひとつは、自らの思想、心情を他者に伝え理解しあうことの重要性である。これはまた他者の言動をひとつの記号として如何に読み解いていくかというプラグマチズムの学びでもあった。そこにはしよせん通じ合うことなど完全には不可能な他者の存在に対する限りない敬意があった。このような考え方はW. ジェームズの多元論に基づき、哲学的立場としてはノミナリズム（唯名論）に属する。もうひとつの学びは「態度の思想（哲学）」とよばれるものであった。プラグマティストのG・H ミードやW・ジェームズに由来すると思われるが、鶴見は以下のように説明する。

## 「方向感覚」を信じて

「思想といいますけど、私は思想は信念と態度の複合だと思っています。信念というのは、明日雨が降る、とかそういうものですね。価値判断です。しかしそれだけではなくて、信念の結びついている態度というものがあります。信念に対する態度のことです。信念というのは人類普遍的の形としてだすことができるわけですが、その信念を法王の前でも屈せずに言うことができるかどうか。それは態度にかかわります。私が戦争中に悟ったのは、人の思想を信念だけとして見ない、態度を含めて思想を態度と信念の複合として見るということなんです。たとえば、若い一等兵が「天皇の威光のもと…」とか何とか文句をつけて、中年の二等水兵を殴っているのですが、そういうときに、同じ一等水兵でも殴らないのがいるんですね…」(鶴見、1991)。

ここでの「態度」は、広義には「行為」という言葉に置き換えることが可能であろう。鶴見は他の箇所では「態度」を「不随筋の反射」とも読んでいる。「態度」ないし「反射」は我々の意識を超えた瞬間的な反応であり、これは意識の水準での理解をはるかに超える。時代や社会、さらには子どもの頃の人間関係などによって知らず知らずに身につけた内容もあり、日本の文化によって育まれたもの(例えば集団主義、同調圧力)なども含まれる。さらには、心のもっと深い層からの影響も考えられる。鶴見は、例えば意識のレベルで近代市民社会の常識や他者を差別することの誤り等を理念として知ってはいても、反射としての行為がその通りになっていないことが多いと指摘する。そして、意識のレベルの価値観と身体レベルの反射との落差や矛盾に気づき、「新しい行動」を習慣化する学習を始めることを説く。これはプラグマチズムの流れにある行動科学的方法であり今日の認知行動療法などにも相当するものである。

鶴見氏の考え方は、筆者が「方向感覚」における無意識的な態度を探るうえで重要な示唆を与えてくれた。ただし現在の筆者には鶴見氏の言う「認

知」を変化させるための新しい行動の学習という視点には異議を持つ。「態度」を形成する心の深層は認知科学のパラダイムを超えた個人の実存の領域の問題であり、そこに焦点を当てた思想こそ個人の根源的な自由の根拠になり得ると信じるからである。「認知」を変えるために習慣を再学習させて脳内に変化をおこさせるという方法は極めて操作的、侵入的である。プラグマティストのハクスリー、A. やジエームズ、W. そして鶴見自身も薬物による脳内の認知の変化について自ら被験者となる実験を行っているのが残念である。

### 「めだかの学校」と芦田恵之助

「めだかの学校」は鶴見が『私の地平線の上で』（鶴見、1991）に掲載したものである。そこで鶴見は芦田恵之助（1823～1951）の思想と実践を紹介している。

芦田はほとんど正規の学歴は持たなかったが、尋常小学校の助教から初め、独自の国語教育を開発して生活綴方運動の創始者になっていった。芦田は型式的な作文教育に反対して児童の書きたいこと、日常生活で児童が実感した内容を自由に書かせる綴方運動を始めた。生活綴方運動はやがて児童が自らの貧しい生活環境を記録して見つめ直していくという思想運動（北方性教育運動）へと発展していった。当然、当時の国家権力から激しい弾圧を受けた。しかし、結果的にはデューイの経験学習とほぼ同時代に存在した日本土着のプラグマチズムの思想として、戦後、丸山らに高く評価された。芦田は児童に接する際「教える者—教えられる者」という境界を越えて、「人間は、教師も生徒も、自分自身にたちかえって虚心に世界をすることからはじめる他にない」（鶴見、1991）という直感に基づいた作文教育を行った。ここで芦田の言う「虚心」は、ある種の宗教的境地でもあった。「虚心」は道家（老子、荘子）のいう「無」の境地に近いもの



## 「方向感覚」を信じて

である。芦田自身には実際このような境地が体験できていた。芦田はまた「知識の借り着をぬいだ虚心の自己となり、自分の今まで経験したことを通して「自分だけに残っている印象を吟味」することの意義についても強調した（鶴見、1991）。芦田は「自分にだけ残っている印象」について以下のように説明している。

「おのが想とは、注意して観察したる事項なり。研究して会得したる道理なり。いやしくも、見聞きし、思考して、理解し思うことは、皆我が想なり。花のさき出でたる春の野をうつくしと見るも想なり。花の咲くは同類を繁殖せしめんとする作用なりと考えるも想なり。嬉しいといい、悲しいといふも想なり。過去の失敗・成功の思い出も想なり。要するに我が心に想い浮かぶことすべて想ならぬはなし。（芦田、芦田恵之助全集、1967）

ここでの「想」は印象に相当するものと考えられるが、これは「言語化以前の思考」であり、「イメージ」に近いものと言える。芦田は「言語化以前の思考」「文字化される以前」の体験を土台にして新しい認識に向かう方向性を作文教育から明確にしていった。この方法は筆者の「方向感覚」にきわめて近いものであり、瞑想的な体験を通すと理解しやすい。理由は、瞑想的体験が意識よりも深い層に自我が降りていく体験であり、そこでは、概念以前のイメージに直接触れ得るためである。そして芦田は、当時の小学校教育の児童の個性を殺し差別を生み出す教育として以下のように批判している（傍線は引用者）。

「私は児童がいかにして劣等児と呼ばれるに至ったかを思う時、まことに気の毒が感じがいたします。新しいかばんをかけて、新しい草履袋を下げて、父か母かに連れ添われて、初めて学校に来ました時、何で劣

等児という者があましよう。(中略)それが一学期の通知表をいただく時になると、多少の差がついてきます。二期にはその差が激しくなり、三期には、仲間でも明らかに劣等児として認め、自分でも漸く之を信じるようになります。

劣等児の出ている教室は実に空気がよくありません。よくないから、劣等児が出来たともいえましよう。師弟全部が共に育つのを楽しむというような和やかさは、さらさらに感じられません。一から十まで、児童の名誉心、競争心に鞭うって、勝つたとか、負けたとか、当たったとか外れたとか、成功したとか、失敗したとか、まるで十六勝負のような生活です」。(芦田『芦田恵之助全集』、1967)

芦田の言う(正確には鶴見の表現であるが)「めだかの学校」とは、生徒と教師がともに「虚心」になり、双方の壁を取り除き、その「場」の環境に溶け合い、そこでの直感を頼りにして知識に向かうことに他ならなかった。芦田のこのような態度は、やがて教え子だった吉野源三郎(児童文学者、反戦思想家、編集者、1899～1981)に引き継がれていった。吉野は戦前の軍国主義下で「君たちはどう生きるか」という児童向けの哲学書を書き上げ、近年でもリバイバルが起りベストセラーになったことをご存知の方も多いと思う。吉野は其中で以下のように述べている。内容は主人公の中学生コペル君に叔父さんが「生きるとはどういうことが」を助言する下りである(吉野、1937：傍線は引用者)。

「君も、もうそろそろ、世の中や人間の一生について、ときどき本気になって考えるようになった。だから僕も、そういう事柄については、もう冗談半分ではなしに、まじめに君に話した方がいいと思う。…そうはいっても『世の中とはこういうものだ。その中に人間が生きているということには、こういう意味があるのだ』などと、一口に君に説明する

## 「方向感覚」を信じて

ことは、誰にだってできやしない。このことだけは、ただ説明を聞いて、ああそうかと、すぐに吞込めるもじゃあないのだ。…それは自分で見つけてゆくしかないことなのだ。…だから、こういうことについて、まず肝心なことは、いつでも自分が本当に感じたことや、真実心を動かされたことから出発して、その意味を考えてゆくことだと思う。君が何かしみじみと感じたり、心の底から思ったりしたことを、少しもゴマ化してはいけない。そうして、どういう場合に、どういう事について、どんな感じを受けたか、それをよく考えてみるのだ。そうすると、ある時、有る所で、君が有る感動をうけたという、くりかえすことのできないただ一度の経験の中に、その時だけにとどまらない意味があることがわかってくる。それが、本当の君の思想というものだ…これは、難しいことばでいいかえると、自分の体験から出発して正直に考えていけということなんだ。」(吉野、1937)

文中の「君がしみじみと感じたこと」から出発して体験の意味を感じるこの大切さとそこに生き方の方向性を求める姿勢などは、「虚心」から出発して体験の意味を探る芦田の思想に非常に近いものを感じる(傍線は引用者)。筆者の「方向感覚」も芦田の「虚心」に近いものを感じる。

以上述べてきたように、芦田の「虚心」の境地から導き出された「言語以前」の思想を尊重する態度は、筆者の「方向感覚の思想」を形成する上で貴重な学びになった。そして何よりも、「教える者と教えられる者」を超えた空間(場)の成立させる芦田の教育姿勢は筆者の学風になりつつある。

## 忘れられた思想家岡田虎二郎について

芦田は岡田虎二郎(岡田式静坐法の創始者、1872～1920)のもとで、静坐の指導を受け、岡田を生涯の師として慕った。芦田は岡田を通して得

ることが出来た境地について以下のようにも語った。

「私は亡びることも願わず、興ることも願わない我が生のためにする唯一の静座を、我が一身にのみ行じて来ました。その結果は65になって、一人で何処までも旅をしても、少しも寂しさを感じないという結果を得ました。これが感謝しないでいられましょうか（芦田、1967）。」（芦田、『芦田恵之助全集』、1967）

岡田の思想は現代では余り語られないが、筆者の「方向感覚」の思想や「瞑想箱庭療法」に多大な影響を及ぼしている。特に、岡田の人生や世界に対する宗教的姿勢は、真宗大谷派寺院の住職を務める仏教者としての筆者に多大な感化を与えている。

岡田は愛知県渥美郡の農家に生まれた。高等小学校卒業後にすでに自家の農業に従事するとともに、害虫駆除の独創的方法を発明して優れた白米を作り、25歳にして全国を講演行脚するほど著名になった。岡田は正規の高等教育機関での教育は全く受けなかった。当時の学校教育のシステムは岡田の個性に合わなかった。しかし、並み外れた読書力を持っていた。英語を独学して30歳で単身アメリカに渡り、様々な大学図書館で特にエマーソンなど初期のアメリカ思想やクエーカー教（プロテスタントの一派で特に反戦思想を重視する）を通して自由主義、デモクラシー、個人主義を学んだ。帰国してから結婚するが、岡田の開明的な考え方と態度が妻の実家から理解されず、やがて孤立して身心を病んでしまう。その時に岡田は東洋の思想、特に道家・老荘思想に触れ、特別な師につくこともなく既成のいかなる宗教、宗派にも属さず、ひたすら自己流の瞑想にうちこんでいった。そして3年後に伊吹山の山中で突如開悟し、「虚心」の状態を体得した。岡田は自ら実践創始したこの方法を岡田式静坐法と名付けた。岡田式静坐法は既成の宗教に属さない東洋思想（道家、禅）に立脚した身心の修養方法であったが、優れて宗教的な色合いをもつものでもあった。

## 「方向感覚」を信じて

当時の職業的宗教者の大部分は国体を基盤にした悟りや信心を説いていた。例えば、仏教界では（当時より少し遡るが）、真宗近代教学の祖と言われる清澤満之が若くして精緻な宗教哲学理論を展開させ、教壇の近代化運動に尽くした。しかし、最終的に「他力の信心」とは「戦争においては銃をとり平和の時には平和に従えばよい」などと「あるがままに現状を肯定」することにと求めた。それは「個（我）を捨て」、「状況に任せ」、「身の程をわきまえた生活」することに凡夫の救済の根拠を求めることでもあった。岡田の思想はこの時代の多くの宗教者の「悟り」や「信心」とは異なるものであった。

岡田は40歳で上京すると、東京の本行寺を中心にして都内の随所に静坐会を作り、「身心の修養」を目的として静坐指導を行った。岡田の実践は学歴も名声も経済力もなく、いかなる既成の宗教団体にも属さない者の実践であり、最初のうちは世間から胡散臭く怪しいという印象を持たれたようだ。それでも、岡田の熱意で実業家、文学者、社会運動家などの幅広い層の人々が少しずつ集まり、瞑想指導をうけるようになっていった。一説には岡田の亡くなるまでの数年間で10万人以上が瞑想の指導うけたと言われる（ただし、その中には、静坐を健康法の類と考えた人が多かったことも事実である）。

そうした人々の中でも前述した芦田恵之助、政治家で社会運動家の田中正造、キリスト教的社会主義者の木下尚江、経済学者の河上肇、実業家で中村屋の創業者相馬夫妻などが著名である。特に、田中は岡田式静坐法とそれを通しての田中の「気づき」により、足尾鉍毒事件で住民ともども湖の底に沈められそうな谷中村に最後まで留まることを決意した。

岡田は生前に著書は残さなかった。岡田の言行は静坐を通して彼に接した多くの関係者の記憶に刻みこまれ、言行録として記録された。岡田の瞑想方法は、深い瞑想に入るために丹田に「気」を集中させる呼吸方法を要とした。岡田は瞑想を通して「道」に達することを重視した。「道」は「零」

であるとされる。岡田は常に「もし静座法を書くのであったら、零一つ以外に書くことはない」と言い、「I、You、He の起こる前にゼロがある。ゼロを知るのが静坐である」とも述べていたという。また、他のところでは「零を知って無為に到る」

(岡田『岡田虎二郎先生語録』1937)

とも述べている。そして、ここで重要な点は「いかなる規定からもはずれる主体としての自己」ということである。このような自己は、岡田の言葉で言えば国家や民族や性別をも超えていくものでもあった。岡田の死後発見された日記には次のようにも記されていた。

「人は妻子に対するより更なる職分を有す。大和民族の良心的束縛を解放し、自由の天地に導くために一身を犠牲に供すること、すなわち是なり。」

また、別のところでは常に以下のようにも述べていた。

「私の考えるデモクラシーは、流行を追わず、宣伝に乗せられぬ、自主独立の人間をつくることだとっております。」(小林『岡田虎二郎とその時代』2000)

ただし、我々がここで言われるような日本民族を超えた自主独立の人になるためには自我が瞑想を通して「零」にまで遡れなければならない。筆者はそこまで遡るためには日頃の日常生活での自分自身に対する激しい執着が必要であり、「自我」にこだわり続けることが大切であるとする。こうした「自我」は日本の集成的で同調圧力的な「和の文化」に馴染めず、それに苦しめられてもなおかつ自分を集合の価値基準から外れた「罪悪深重の凡夫」などと規定せず、おのれの社会的不適応を個性として前向きに受け入れていける自我でもある。こうした自我であるが故に瞑想中の「退

「方向感覚」を信じて

行」に任せることが可能となると推測する。そして、そこでの退行が創造的なもの（創造的退行）となり、日常生活に新たな気づきをもたらす経験となると考える。以上、岡田のテキストと実践は筆者が「方向感覚」を言語化する糧になっている。また、筆者は岡田の瞑想の技法を心理療法にも取り入れている。「積極的に治そうとしない療法」としての「瞑想箱庭療法」を創始する動機にもなっていた。

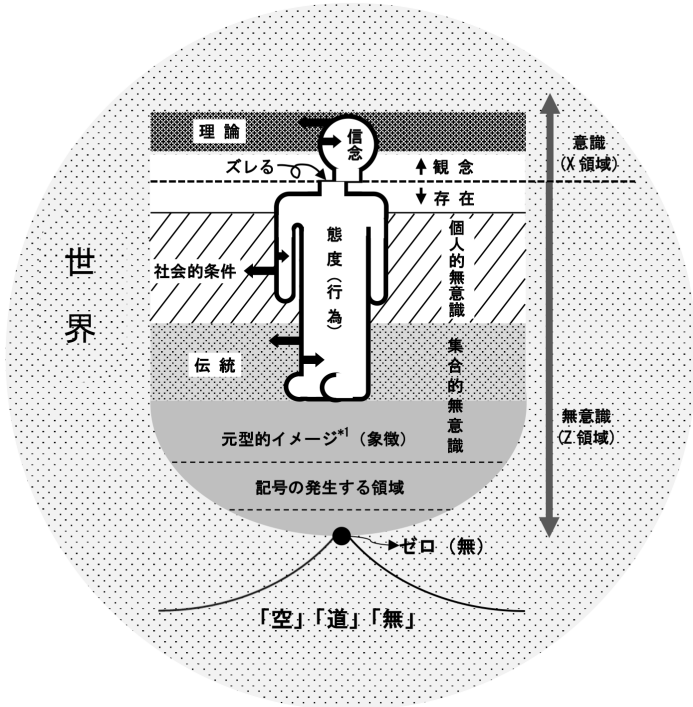
岡田から指導を受けた田中は岡田から以下のように教わったとも述べている。

浮かばんと欲せば、まず沈むことを学ぶべし。…身をたてんとするものは、まず沈むべし。沈むいうことをつとめれば、浮かばざらんとするも浮かぶなり。しかるに今の青年、浮かばんとのみせるために、浮かばずして沈むなり。哀れむべきかな（田中正造全集編纂会編、1978）。

当時（1900年代）は富国強兵・殖産興業の国策のもと、多くの青年たちが立身出世を夢見て受験勉強し上京した。立身出世できることが輝かしい社会的成功であった。しかし、それに敗れて挫折する若者も数多くいた。やがて、こうした若者の暗い情念と地方の貧困化が、日本をファシズムに向かわせる原動力のひとつになっていった。こうした中で岡田は青年に対して、このような世相への適応を図ることよりも「沈むこと」、「不適応である」ことの重要性に触れた。筆者は岡田が以上のような強固な「個」の思想をエマーソン等から学び、それが土台となった上で東洋的な伝統思想（特に道家・荘子）に出会い、それが岡田流に翻訳されたものと推測する。

方向感覚の構造についての見取り図

ここまで筆者は「方向感覚」の体験について、同朋大学での体験を基にして鶴見、芦田、岡田などの実践、思想を例にして語った。それは「方向感覚」の体験が、鶴見以外はひとつの「境地」であるために先行者の例を出すことが適切と考えたからである。ここで筆者の「方向感覚」の思想の見取り図を描き説明する。



\*1：ここではユング心理学で問題にしている元型的イメージの領域については特にふれない。この領域は心理療法やアートの世界で問題にされる。

※上原（1990）の図を参考に著者が加筆

方向感覚のモデル図



## 「方向感覚」を信じて

「方向感覚」とは自我が日常意識から上図のZ部分に退行することに他ならない。これは「瞑想的な体験」でもある。そして、自我がゼロポイントに触れると、あたかもすべての存在と融合し変化しているような体験をする。このような自我の体験は仏教や道家で言われる「空」・「道」・「無」に通じるものである。例えば、荘子は次のようにひとつの例え話を用いて述べている。「胡蝶の夢」として我が国でも古来より親しまれている文章である。

いつか、荘周は夢のなかで蝶になっていた。ひらひらと舞う蝶の身に、気持ちよく満足しきって、自分が荘周で有ることも忘れていた。やがてふと目が覚めれば、まぎれもない荘周である。はて、これは荘周が夢で蝶になっていたのか。それとも蝶が夢で荘周になっていたのか。荘周と蝶には、きっと区別があるはずだ。これこそ「物化」(万物の変化)というものなのだ(老子・荘子、2004)。

これはおそらく芦田や岡田の「虚心」・「零」に近い境地である。ただし、ゼロポイントまで触れた自我はそこにとどまらず、再びX領域へと戻る。その過程のなかで様々な「気づきの体験」が成立する。気づきの体験とは「新しい認識」に他ならない。それは、意識的には明確に把握しづらい体験でもあろう。理由は「気づき」が意識と無意識との境界で成立するためである。「気づき」とは自己を俯瞰する体験である。しかし、その時には図における頭の部分と胴体の部分のズレはなくなっている。これは古来から言われる「身心一如」が成立しているためである。先の同朋大学での教室等での「場」と一体になった体験がそれに近いものと考えられる。筆者の中で「これまで概念」が碎かれ、イメージが湧出してきたのは、図で言えばZ領域のイメージ、象徴の領域と筆者の自我が関係するためと考えられる。なお、以上のことを西洋哲学の粋とも言えるハイデガー『存在と時間』の

言葉で説明すれば、「認識 (Erkennen)」の水準から「存在 (Sein)」の水準に回帰し、認識ではなく根源的な「気分 (Stimmung)」によって世界や自らを知る経験といえる。ハイデガーはこのことについて以下のとおり述べている (ハイデガー、1991)。

… (前略) 認識が開示しうる諸可能性のおよぶ範囲は、気分の根源的な開示とくらべれば、あまりにも狭小であるからであって、気分のうちでこそ現存在は… (中略) …おのれの存在に当面させられているからである。

ハイデガーの言う「気分 (Stimmung)」は「合っている (stimmen)」ことに由来する。ドイツのレストランでウェ이터にチップを渡すときは、多めに小銭を出して "Stimmt so" (これで合っているよ) と言うなどごく日常的な言葉である。自我が認識の水準を脱して世界や身体と一如になるとき、世界・身体・自己に関する根源的な開示が成立するのである。

整理すると「方向感覚」とは、自我が無意識層の深い領域に退行し再び意識に戻ることか1ら生じる「気づき」を意味する。当然のことであるが、「気づき」が生じる段階では、再び主客が別れ、自我は意識の層に近づいてくる。「気づき」はこの意識と無意識との境界で成立するものと推測される。それ故に、我々にとっては「半ば意識的」「半ば無意識的」であり、「気がついたらそうになっていた」というものである。にもかかわらず、そのような「気づき」がこれまでの日常生活では意識出来なかった新しい態度(行動)の方向性へ導くものである。

また「方向感覚」では X 領域に存在する様々な観念、概念への固執が破られ、日常生活においては「善悪」の判断に固執しなくても、その都度「柔軟」な姿勢で対応出来るようになる。これは「社会的条件」に振り回されない事である。柔軟な姿勢での対応はまた、広いパースペクティブを獲得できるようになる。さらに、先述した吉野の引用にあるように、ものごとに対して心底感じられるようになる。これは主観と客観の対立構造が瞬間的に超えられ、日常生活においては「思考的判断」「感情的判断」に邪魔

「方向感覚」を信じて

されていた「感覚」「直感」機能が賦活するためである。

以上が簡単な方向感覚の見取り図である。なお、「方向感覚」についてさらに詳しく知りたい方は、直接に芦田の文献にふれたり、その心理臨床場面や生活場面での応用である筆者等の「瞑想箱庭療法」に関する著書を読まれることをお勧めする。

参考文献

- 芦田恵之助 芦田恵之助選集 いずみ会 1967 91  
ジェームズ、W. (榊田啓三郎) ウィリアム・ジェイムズ著作集 3 (宗教的経験の諸相・上) 日本教文社 1962  
ジェームズ、W. (榊田啓三郎) ウィリアム・ジェイムズ著作集 4 (宗教的経験の諸相・下) 日本教文社 1962  
ジェームズ、W. (上山春平訳)、ウィリアム・ジェイムズ著作集 7 (哲学の諸問題) 日本教文社 1961  
小林幸蔵 岡田虎二郎—その思想と時代— 創元社 2000  
小林信子編 岡田虎二郎先生語録 静坐社 1937  
西田幾多郎 善の研究 岩波書店 1991  
田中正造全集編纂会編 田中正造全集 12 (日記 4) 岩波書店 1978  
鶴見俊輔 鶴見俊輔集 8 (私の地平線の上に) 筑摩書房 1991  
上原隆 普通の人の哲学—鶴見俊輔・態度の思想からの冒険— 毎日新聞出版 1990  
山田直之 芦田恵之助の教育思想—とらわれからの解放をめざして— 春風社 2020  
吉野源三郎 君たちはどう生きるか 岩波書店 1982  
老子・莊子 (福永光司・興善宏訳) 世界古典文学全集 17 莊子・老子、筑摩書房、2004  
ハイデガー 世界の名著『ハイデガー』1960、中央公論社

補足

文中にある岡田虎二郎先生は愛知県田原市に誕生されました。現在、市に記念館があります。また、岡田先生に関する多くの資料が愛知教育大に保管されております。筆者は残念ながら、在職中にそれらに触れる時間がありませんでした。関心をお持ちの方は是非お訪ねください。

大 住 誠

御礼

8年間の在職期間を通じて同朋大学の教員、職員のみなさまには本当にお世話になりました。特に目黒達哉研究科長、石牧教授には身心ともに支えていただきました。感謝の限りです。本当に有り難うございました。